

『四国徧禮道指南』以前の四国遍路の聖地の景観

稲田 道彦（香川大学経済学部教授）

The landscape of sacred places before "Shikoku Henro Michishirube"

Michihiko INADA

Professor, Faculty of Economics, Kagawa University

Shinnen, the representative author of books on the Shikoku pilgrimage during the Edo period, is said to have experienced the Shikoku pilgrimage between a few times and more than twenty times, a number that differs according to various books. Practicing asceticism by traveling to sacred places is what constitutes a pilgrimage and it is thought there was a transitional change in the form of making the Shikoku pilgrimage by worshipping at the eighty-eight temples during the Edo period.

Shinnen is said to have been someone who experienced both forms of the pilgrimage. One was by traveling to each of the sacred temples and the second was by practicing asceticism during the time when the Shikoku pilgrimage was considered to be a place where one was to give up all luxuries of life and train religiously. The places where ascetics trained at while traveling to the various sacred places have been identified in the "Shikoku Henro Michishirube" as /okunoin/ (inner sanctuaries) or /zenjo/ (places of meditation). By looking at the descriptions of such places in that book as well as temples and shrines visited outside of the eighty-eight temples recorded in /nokyochō / (pilgrimage books) of the Shikoku pilgrimage from the Edo period, I selected what could be considered sacred places. I choose places with peculiar landscapes where a deity might dwell such as large rocks, rocky cliffs, rock caves and underground caverns, in other words places that would create a unique feeling such as fear or divineness in a person visiting this spot.

I also highlight places with special geographical features such as fossil shells or places that have special plants such as the cherry blossom that grows in mid-January. As well I describe places where you can vicariously experience something that has happened in the past such as a miracle story. Furthermore I also consider such places where one can overlook the peaceful landscape and where one can feel a sense of happiness. I believe that making a pilgrimage to sacred places before the present form of going to specified temples was created based on where one could deeply observe unique landscapes and natural objects.

1 はじめに 仮説の提起

筆者は眞念が「四国邊路道指南」を発行した時代に四国遍路の姿が大きく変更したと考えている。変化の第一は①江戸時代に88の寺社を参拝することが四国遍路の巡礼形式となった。それまでは、日本人が古来より神聖と考えてきた場所、例えば磐座や深山のような場所や、寺院や神社の建物の中の本尊を参拝していた。参拝場所はたくさんあり、どこで、何を崇敬するか何を参拝するかという点について、これが四国遍路の巡礼の形式であるという統一的な思想がなかった。それが88の寺社とその本尊、そして弘法大師を参拝しながらめぐるという形式に整えられた。次に②それまでの巡礼者は、僧侶、聖、行者などの宗教家や庶民の宗教に発心した人であった。この本が出版される時代にそれら専門家から一般大衆が四国遍路として四国を回る時代へと転換した。専門家の時代には多様な場所で修行することが巡礼の目的であったが、大衆化して、四国各地の札所寺院を参拝して歩くことが巡礼の目的となった。背景には江戸時代に、各地の旅行を可能にする社会的インフラの整備があり、また弘法大師信仰の興隆、庶民の経済的な余裕が生じたことがあっ

たと想定している。

ここで述べようとする研究の目的は、88の寺社が参拝目的となる前の時代の四国巡礼はどこに行っていたのか考えようとしている。古い参詣地を聖地と考え、四国で参拝すべき聖地はどういう場所であったのだろうか、それをいくつかの資料により仮説としてあげてみたいと考える。

2 『四国徧禮道指南』における札所寺院以外の拝所などの記述や場所

① 真念の初版本の記述

最初に出版された真念の著作には、最後のところに、『大師御邊路の道法は四百八十八里といひつたふ 往古は横堂のこりなく おがみめぐり給ひ 險阻をしのぎ 谷ふかきくづ屋まで乞食させたまひしがゆへなりと云々 今は劣根僅かに八十八ヶの札所計巡拝し 往還の大道にて手を拱御世なれば 三百有余里の 道のりとなりぬ』という記述がある。

真念は四国を数度、本によっては10数度または、20度と回り、自身で斗敷する頭陀と述べるとおり、経歴としてここでいう前の時代の、行者の修行を積んだ人であったと考えている。その経歴の上に四国遍路のガイドブックの『四国邊路道指南』を書いたと想像している。この本の中にも88の札所以外の参拝場所がでてくる。今回は『四国邊路道指南』の改版本にあたる『四国徧禮道指南』をとりあげ、そこにでてくる事例をてがかりに札所以外の四国遍路の聖地に関する分析をおこなう。

② 『四国徧禮道指南』における札所寺院以外の拝所などの記述

この本では、各札所で共通して提示される情報と、寺院から移動する間に真念が特に書き込んだ情報に分けて考える。どこの札所にも共通して書かれる情報は、『寺院名 地貌、所在地(住所)、本尊の図像、座像か立像の別と長さ、本尊の仏像名、仏像製作者、札所の御詠歌、次の札所までに通過する地名、距離、渡渉する川の名、地藏堂などの堂、宿を貸す人の人名』がある。真念が特に書きこんだ情報には札所以外に各地の堂や横堂の記述がある。煩瑣になるためここでは堂にまつわる情報を省いて、以下にその外の記述をとりあげる。これが以前の修行地の様子をうかがわせる記述と考えているからである。

阿波の国では、5番地藏寺には世俗で「まんびょうゑん」といわれる妙薬があることをあげる。11番藤井寺を過ぎて、弘法大師が菩薩道具の総楊枝を加持し、それが糸柳になり、その下に湧き水がある。遍路にとって飲み水となる。12番焼山寺では禅定ありという記述がある。現在も穴窟などの修行の場所が残っている。また四国遍路創設の伝説の一つの右衛門三郎の塚印の杉がある地藏堂を伝えている。13番一宮寺では奥院有、と書かれる。滝の行場のある建治寺のことであろうか。18番恩山寺を過ぎて、弦巻坂の下黒藪という竹があり、ここ(釈迦院)に弘法大師降誕のむつきを納めた伝説がある。

19番立江寺では、石橋に白鷺がいるときは橋を渡ってはいけないという伝承をあげている。岩脇村の取星寺に弘法大師が呼び寄せた青黒色の星がある。星谷の岩屋寺に広さ十畳敷きの三角の巖がある。この中に明白の鏡石がある。三丈ばかりの滝もある。取星寺の星が下る時に落ちてきた石といわれる。隕石落下を想像させる文である。夜寝つけないほど難儀した弘法大師が加持したため坂本村では露や霜がおりないという。灌頂が滝では日に3回五色の雲とともに不動明王が降臨する(滝の水により虹が出現する)。鶴林寺奥院の慈眼寺の上に不思議の峰と岩穴がある。穴禅定といわれ、洞内の諸仏を回る。弘法大師が護摩と虚空蔵求聞持法をここで修したことのあつた霊洞である。

21番太龍寺では御詠歌に龍が常に住む岩屋がでてくる。今は破壊されてしまった龍の岩屋のことである。22番平等寺をすぎて、月夜村には弘法大師の伝説がある。そして逆瀬川には先端が尖らない川蜷がいる。弘法大が加持したためである。阿波国最後の札所の23番薬王寺を過ぎると、駅路寺の打越寺がある。八坂坂中八浜浜中で行基菩薩が、鯖を馬で運ぶ人夫に鯖を乞う話が出てくる。この申し出をことわったら馬が倒れてしまい、鯖を差し出すと馬が飛び上がって元に戻るといふ話であり、慳貪な心を戒める教訓になっている。母川では大師が加持してどんな日照りにも水が枯れることがなくなった。

土佐に入り、室戸岬には大穴があり、ここに太守が五社を建立し愛染権現という。この穴に毒龍がいて大師が退治し権現を置いた。東の穴に大神宮の社が設置されている。室戸岬の下に霊水があり、この水を死者に供える。室戸岬には求聞持法の道場や庵がある。この後ろに岩窟があり如意輪観音をまつ。この石像は竜宮より上がってきた。夜には龍燈も上がる。27番神峯寺の麓の唐浜に喰わず貝という石の貝がある。大師が加持したため石になった。これも慳貪の戒めを説く教えとなる。現在も大量の貝化石を見ることができ

る。36番青龍寺を過ぎて八坂坂中八浜浜中という難路がある。船でいけば横浪まで牧場などの景色が見える。出見村に花山院の離宮がある話が紹介される。土予国境に近い番外札所の月山は三日月の形をした石が本尊である。そこへ行く途中の竜串の海岸には奇石がたくさんあり、特異な景色を出現させている。

土佐から伊予に至る道に、謂れがあって、篠山の麓の正木村の庄屋は夜雨戸を締めないと書かれる。番外札所の篠山観世音寺の近くの矢筈池の中に不思議の石があり、池の周りの笹竹を食べに毎夜龍馬が来る。諸病に効くといい、この笹竹を人々が持ち帰る。伊予の国に入り、光満村を過ぎたところに1年に7度実をつける七度栗がある。明石村に明石という大石がある。この石を白玉権現という。石には言い伝えがある。

45番岩屋寺近くの古岩屋では先に亡くなった方の回向をする場所である。三坂峠から松山の城下と伊予富士の姿が、遍路の気持ちを晴れ晴れとする良い景色であると紹介される。47番八坂寺近くの恵原村の大師堂の南に、右衛門三郎の亡くなった8人の子供の塚がある。51石手寺を行くと、河野氏の古城湯築城にでる。同所に一遍上人の寺、宝厳寺がある。道後の湯には景行天皇より代々の天子が行幸した。日本書紀や源氏物語にもその名がでる。湯壺が5つある。三津の港町はにぎわっている。山越村に正月十六日桜といって、この日に満開になる桜がある。55番の別宮は三島の前札所で本来の大三島までは七里ある。

60番横峯寺、横峯寺より二町登ると黒金の鳥居がある。ここから石鎚山を遥拝する。6月1日から3日間だけ禅定が許される。64番里前神社、蔵王権現の社が石鎚山の前札所でここに参拝する。本来の札所は石鎚山の成就にある前神社である。ここからも石鎚山は6月1日から3日間だけ参詣できる。65番三角寺の奥の院(仙龍寺)は本尊が弘法大師の御影である。雲辺寺へ上る坂の途中に弘法大師が湧きださせた泉がある。

讃岐の国の68番琴弾八幡宮から見ると、青い海と空が一色に溶けこみ、島々を見下ろし、有明の浜と観音寺の町に出入りする舟が見える景色がある。良い景色である。72番曼荼羅寺の西に水茎の丘という西行の住んだ庵の跡がある。次の73番出釈迦寺では参詣する場所は山頂にあったが近年麓に堂と寺を建てた。75番善通寺から金毘羅に参拝するのでしたら善通寺に荷物を置いていくとよい。78番道場寺をすぎて、野沢の霊水があり、そこから五町上がった山上に医王善逝(薬師如来の石仏・大師の御作)がある。81番白峯寺の稚児が嶽で、備後国安郡曾根原の宝泉密寺の雲識が飛び降りた。奇跡が起き、黄色い衣の僧が受け止め、雲識は谷底より飛び出してきた。釈迦や弘法大師の捨身伝説に通じる伝説である。84番屋島寺では壇ノ浦で源平の合戦にちなむ場所を取り上げ解説している。85番八栗寺には奥院がある。途中田井村に道休禅門の墓があり、かれはすでに履物をはかずに四国を12回回り、全てで27度の四国巡礼をしている。87番長尾寺をすぎて額村で弘法大師が修法をなされた護摩山がある。経座ともいう。

というように各地の遍路が立ち寄るべき場所が述べられている。これらの内の多数は札所が定まる前の四国の修行者が立ち寄っていた場所の名残を示していると考えている。それぞれの場所の詳細な調査は今後の課題とする。

3 澄禅の「四国辺路日記」における札所以外の拝所などの記述

澄禅は真念の著作が出版される34年前の承応2(1653)年に四国を巡礼し、旅日記をつけている。彼の日記には88ヶ所という数字の記述はない。その後に88ヶ所が定まると想定されているが、かれは88ヶ所にあたる札所はすべて訪れている。ここでは彼が訪れた札所の88ヶ所以外の訪問地をあげる。

阿波

持明院(徳島)、焼山寺奥院での禅定、鶴林寺奥院の滝で午の時には水が逆に立ち上り不動明王が現る、太龍寺奥院岩屋、鐘の石とて金のような石、地藏院(浅川・宿泊)大師堂(海部、遍路屋で遍路の日記を買う)、宍喰に遍路屋とて寺あり、

土佐

奇巖妙石に札を納む(仏崎)、岩屋一段高き所に石を磨き結構な社がある、愛満・室満権現といい当山の鎮守、小さき岩屋、大師が修行し給える求聞持堂、唐浜のクワズ貝、足摺山の七不思議、宝満・愛満・熊野の三ノ滝、御月山、

伊予

弘法大師が岩屋寺を大宝寺の奥院とした、岩屋寺セリ割の頂に札を納む、岩屋寺の岩穴に札を納む、道後温泉、大三島、鉄ノ鳥居にて石鎚山を遥拝する、浦ノ堂(泉川・宿泊)、奥院(仙龍寺・景色は筆舌に尽く

しがたき)

讃岐

琴弾八幡宮からの景色は四国中でも無類の境地、弥谷寺の石の面の彫りこみのア字、白方屏風ヶ浦の海岸寺、篠新太夫の三角屋敷、八幡の社（大師の氏神）、出釈迦山の峰（曼荼羅寺の奥院）、金毘羅大権現、金山薬師（野沢の八十蘇の水・大師の定めた札所）、五色台の由緒ある水の上の地藏堂、白峯山の崇徳天皇の逸話、源平合戦の古跡、八栗山の頂上の当山権現・愛宕権現・弁財天に札を納む、六万寺（大師が幼少のとき6万の土仏を作って安置する）、菌の尾が流れきた霊木で観音像を作る、六院家とて法燈を取る寺

この記述には、澄禅が宿泊のために訪れた寺院もあるが、眞念の著作にあげる場所と重なることが多い。

4 納経帳における札所寺院以外の納経

江戸時代の納経帳にも札所以外の納経印を受けている箇所がある。納経帳の記述内容の分析を2期に分けて示す。その理由は安政の大地震により土佐藩と宇和島藩が遍路の入国を禁止したために、遍路の歩く経路に変化が生じたためである。表1に安政時代以前の札所以外の納経場所と表2に安政～明治5年の納経帳に表れる番外札所の名前を記入した。

表1 江戸・安政時代以前の納経帳の中の番外札所での納経

年	阿波	土佐	伊予	讃岐
宝永7- 正徳4、 (1710-1714)	慈眼寺、取星寺	養品寺(安芸郡慶浜村) 月山	篠山、願成寺、出石寺(喜多郡金山)、大林寺(松山)、千秋禅寺(松山)、長福寺(越智郡)、波北寺(?今治)、生口島光明三昧院、祥雲寺(岩城村)、宝林寺(鍋地村)、金光山奥院(仙龍寺)	仏生山
寛政2、 (1791)			金光山奥院	
寛政4、 (1793)			篠山、厳島(芸州)	
寛政13、 (1801)	五百大阿羅漢		安養寺(関伽水旧跡)、仙龍寺	仏生山、白鳥大神宮
文政3、 (1820)	五百大阿羅漢		篠山、妙長山法円寺(宇和島)、仙龍寺	田村大社
文政6、 (1823)	月夜御水庵		篠山、厳島(芸州)、仙龍寺	
文政9、 (1826)	太龍寺龍窟	月山	河野義安公開闢(道後)、仙龍寺	田村神社、地藏寺(志度寺奥院)
文政11、 (1828)	無銭渡光明寺、慈眼寺、黒滝寺、千福寺、玉厨子山泰仙寺	八幡宮(八幡村)、別府山横倉寺、月山	大師庵(浮穴郡)、正善寺、妙雲密寺(60番前札所)、仙龍寺	仏生山
文政12、 (1829)	五百大阿羅漢、御水庵		篠山、仙龍寺	海岸寺
天保2、 (1831)	月夜村大日寺		篠山	田村神社、志度奥院奈厄寺
天保6、 (1835)	五百大阿羅漢、柳水庵		龍光院	仏生山
天保10、 (1839)		月山	正善寺	
天保10、 (1839)	五百大阿羅漢、御水庵		法佛山遍照密院(松山)	
天保11、 (1840)	五百大阿羅漢、無銭渡光明寺	眞念庵(難読)	60番前札妙雲密寺	
嘉永2、 (1849)推定	五百大阿羅漢、杖杉庵、箸蔵		仙龍寺	金毘羅大権現

出典①稲田道彦(2001)「景観としての遍路道と遍路の行程の変化」、香川大学報告書、に加筆

表1には15冊の納経帳の番外札所の納経場所を示した。左側の年代が当該納経帳の巡礼した年になっている。多くの納経帳に共通する納経所と、一つだけの納経がみられる番外札所がある。

表2には土佐藩宇和島藩が遍路の入国を禁止した時代の納経帳を一括して示した。上段に現代の遍路ガイドブック（「四国遍路ひとり歩き同業二人、解説編」1990）にも掲載される納経所と、下段には現代ではその名がガイドブックに載らない納経所を示した。この期間の納経を記す27冊の納経帳をまとめて示している。

表2 幕末期に納経印をだした番外札所（安政元年～明治5年）

	阿波(徳島)	伊予(愛媛)	讃岐(香川)
現代の遍路案内書に 拝所として掲載されて いる番外札所	五百大阿羅漢、長戸庵、柳 水庵、右衛門三郎霊跡杖杉 庵、慈眼寺、月夜御水、箸蔵 寺	十夜橋、文殊院、伊予遍照 院、三島本宮、古歌名所西 山興隆寺、生木正善寺、金 光山仙龍寺	金毘羅大権現、仏生山法 然寺、經納山海岸寺、志 度寺奥院地藏寺
現代の遍路案内書に 拝所として掲載されて いない番外札所	邊路無銭渡光明庵、焼山寺 奥院、阿波灌頂滝、丈六寺、 一宮奥院観正寺、星谷寺、 安明寺(難読)、月光山明王 院、一夜御候拳正寺、阿波 臼嶽観音院、太龍寺岩窟、 太龍寺無明窟、不明所(難 読)、津峯大権現千福寺、土 州十七ヶ所遥拝處	宇和島窓ノ峠努清山多福 院、瞬目大師浄明寺、宇和 島四ヶ所遥拝處、四十番遥 拝所、円福寺、光明寺、神宮 寺、与州村松地藏庵、大樂 山地蔵庵、イヨ永徳寺、地藏 大士、東山延喜あん、七水い よ(難読)、七度栗務清山多福 院	屏風浦奥白方影向庵、慈 願山遍照院、厄除弘法大 師神光院、白峰根香之間 吉清水庵、岩田山蓮香 寺、神光山大蔵院、一宮 田村大社、聖天山、春日 川攝待茶堂、八島櫻庵、 護摩所金剛庵、白鳥大神 宮

出典（稲田道彦（2011）幕末期の四国遍路の巡礼路の変更、香川大学経済論叢 84-2、1-21）

土佐藩と宇和島藩に入国できなかったこの時期にはほかの時期に比べて多数の番外の札所の納経印を受けている。88のうち20か所の札所に行くことのできない状況が、札所においても代替の札所を探す行為につながったのかもしれない。

5 江戸時代の文献から見た札所以外の聖地（拝所）の考察

眞念の『四国 禮道指南』、澄禅『四国辺路日記』、江戸時代の納経帳の番外札所の納経という資料を基に、近世以前の四国遍路の参拝場所を推定しようとした。個々の場所についての考察はこの後の研究課題とする。これらに共通する嚮性質をあげて、88の札所以外の参拝場所を考察したい。

①自然景観に対する観察力により特異と感ずる場所

地形 岩峰 植物（七度栗、正月十六日桜、喰わず芋や喰わず梨など）

②恐怖感など人に特別な感情を与える場所を特に選んでいる。それは修行など山林修行の行場を連想させる場所でもある

焼山寺の禪定、慈眼寺の穴禪定、太龍寺穴禪定、岩屋寺セリ割禪定、石鎚山頂上参拝、八栗寺山頂の鎖場

③過去の出来事や奇跡譚などを追体験できる場所

室戸岬の御蔵洞、篠山の矢筈池の笹竹、白峯寺の稚児ヶ滝、屋島の源平合戦場

④平和な風景を俯瞰する場所など、人が感ずる幸福感にも配慮している

海上からの浦ノ内湾、三坂峠からの松山平野の風景、琴弾山からの観音寺の風景

このような風景が近世の四国遍路にとって大切な訪れるべき景観であったのではないかと仮説をあげて、次の研究につなげていきたい。